詩時評

第４５回

われ感ずるゆえにわれあり

松本衆司

山極寿一著『老いの思考法』（文藝春秋）の中にこんな条があった。「日本の哲学者である西田幾多郎や梅原猛、それに日本の霊長類学の始祖である今西錦司は、『われ思うゆえにわれあり』ではなく、『われ感ずるゆえにわれあり』のほうが正しいと喝破しました。人間は身体を持ち、五感で他の生物のネットワークのなかに組み入れられて進化してきた存在なのです」この言葉に強く魅かれた。生物的見地から離れるが、――そして、人はそれぞれの素朴な感動を拠り所として生きているのだ、と、私はこの条の後を続けよう。少し詩的過ぎるかもしれないが。

榆久子詩集『夜廻りの拍子木』（詩遊社）を読む。「夜廻りの拍子木」を引く。

火の用心の拍子木が通り過ぎていく／夜廻りの拍子木の音／火の用心の人の声は聞こえずに／拍子木が規則正しく鳴る／ああ夜廻りだ／ニュータウンに住んでずっと／まわりの村から／夜廻りが出る／細かい雨音がする／立って窓を閉める／あ、また聞こえた／／遠く通り過ぎていく／令和六年の拍子木／母も父も亡くした心細い夜には／御詠歌のようにも聞こえ／もうすっかり／目が覚めてしまった／／雨と拍子木の夜／鼻水も涙も出る夜／父母の住むあの世とかにも／夜廻りはあるか

歳末になると、どの地域でも町内の警防団が拍子木を打ち鳴らして「火の用心、マッチ一本火事のもと」などと唱えながら町を巡回する。それは「ニュータウンに住んで」も聞こえてくる。「母も父も亡くした」年の「心細い夜」だからか、一層今が昔と重なる。人は心に生きる思い出を育てながら、今という現実を生きる。

鈴木日出家詩集『白く不機嫌なこどもたち』（土曜美術出版販売）を読む。「脈」を引く。

きみの手首の脈がきこえる／／弔いから帰った生徒を先に戻し／ゆっくりと入った教室には／澱がたれこめ／やり場のない糾弾の眼差しが／教壇に立つわたしのそばに落ちた／フォーマルなワンピースが教室では／迷子のように不釣り合いだった／蛍光灯を点けると／能弁な時間割が起動して／能面な役割をまとっていく／教室に漂う、馴染んだ退屈さを頼りに／日常だった破片をたぐり寄せる／ちいささささくれが深く痛むこともあるよね／敏感な場所にできたきずはいつだってこわいよね／あんなに分かっていたことを／いつから忘れてしまったんだろう／／きみが体中に隠し持った／きずが脈打つ／かすかな音に耳を澄ます／その奥で胎動するささやかな暴動に／せめてもの武器を／ことばの実弾を込めて撃ち放つための／武器を手渡すのがわたしの仕事なのに／きこえないふりをしていた／なだめるように蓋をしていた／どんなにやっかいで／もてあましても／わずらわしくても／それが生きている音／あのときのわたしも／鳴らしていた音／／きずはしずかに疼く／いま、きみの脈をきく

成長期に人間は摂取エネルギーの大半を脳に費やし、その成長が一段落すると、今度はエネルギーを身体の二次性徴に回し、成長ホルモンの分泌が増大する。いわゆる思春期ス

パートと呼ばれる時期である。この人間にとって非常に重要な時期こそが心身のバランスが崩れ、最も不安定で事故や病気に遭いやすくなる。その時期にいる彼らと向き合い、学校教育を担う「キョーシ」（「不機嫌な骨」）の一人として生きる鈴木日出家は、詩人として、そのギリギリの心の前線で、彼らの日常を生きることの尊さを描く。

恭仁涼子詩集『ブライユを讃えよ』（人間社・草原詩社）を読む。**「空気椅子」**を引く。

空気椅子をこのおしりのところに作って座
るのが／ぼくの一番安心する体勢／おかげ
さまで脚の筋肉はムキムキだし／おしりも
きゅっとしている／おしりのきゅっとした
男子は女の子にモテるらしいけど／恋愛す
るくらいなら／僕はこの一番落ち着く空気
椅子に座っていたい

「恋愛するくらいなら／僕はこの一番落ち着く空気椅子に座っていたい」不思議な物語のような、独り言のような、そんな詩篇が居心地よさげに詩集に並んでいる。だけど、いつまでもこの姿勢ではいられない。それもわかっているが、まだもう暫く彫刻のようにこうしていよう。「幽霊と散歩」したり、見事な「蜘蛛の巣」を「むしゃむしゃ」食べたり、とそんな自由で楽し気な、そして少し孤独な詩集である。

後藤光治詩集『続・抒情詩篇』（私家版）を読む。**「機関車」**を引く。

役目を終えた／ボロボロな機関車が／公園
の片隅に置かれている／その前の長椅子に
／背を丸めて／一人の老人が座っていた／
／錆びついた／真黒な巨体と／老人の小さ
な体軀／見つめていると／胸が疼いた／／
この世の／残骸にも似た／二つのものは／
圧倒的な美しさで／初夏の若葉の下に蹲っ
ていた／／ふいに／過ぎ去った／ものがよ
ぎった／消せない傷が／胸の奥で　ざらつ
いた／／機関車と老人は／頑なに動かなか
った／百花繚乱の／碧空の下に

皺深い微笑みに出逢うとうれしい。いい風の吹く日和に安らぐ――左様に、或いは、レンブラントの慎ましい愛の光に包まれた絵を見ると心が震えるように、「ベートーヴェン交響曲第七番第二楽章」（「日々是好日」）そんないい音楽を聴くと心が震えるように、後藤光治の詩を読むとやはり心が震える。何故か、私たちはそれらに、生きることの哀れをしみじみと共感するからだ。

宮沢さえ詩集『山村生活』（詩遊社・詩遊叢書四九）を読む。**「大きなゲジ君」**を引く。

大きなゲジ君がアイロン台の足元で／べっ
たりしていた／動かない／死んだのかも／
寒くなったから／／この間まで／風呂場へ
やってきて／ここはぬくいなあ／湯がかか
りそうになると／タイルを少し上って／や
れやれと言う／／脱衣場にもあらわれて／
ちょっと寒いかなと言う／／リビングルー
ムにもやってきて／しゃかしゃか歩いて／
ちょっと寒いかなと言う／／婆ちゃんが寝
る／畳の部屋にもやってきて／ちょっと寒
いなあ／今年はもう駄目かも／寿命かもと
言う／／ついに／十一月初めに／体長の倍
くらい長い後ろの／髭も動かなくなり／息
絶えた／／君はムカデと似ているが／ムカ
デみたいに噛みついて／毒を入れたりしな
い／姿に似ず　やさしい／婆ちゃんの友達
だった／お前が死んだなんて悲しいよ／／
そういえば蜂とカミキリムシも／ひっそり
と息絶えていた／なんだか晩秋は淋しいな

詩集に収められた四十七篇の詩は、山村の暮らしを見事に描き出して、まるで宮沢さんのそばにいるかのように引き込まれた。引用したこの詩もまた、小さないのちとの交感が描かれており、その暮らしのすべてがこんな

具合だ。自然の中の人間の暮らしが失われていく時代の中で、人として愛すべきものが何であるかを教えてくれる貴重な一冊である。

さとう三千魚詩集『花たちへ』（浜風文庫）を読む。「あとがき」に「この詩集の詩をはじめて書いたのは水曜文庫さんのお店でした。……お客さまからお好きな花と詩のタイトルを伺いその方たちに花の詩を書いたのでした」とある。そうしていろんな所で書き続けて三年、一二七篇の詩が、縦長の小ぶりな装丁の詩集に横書きで収められている。二篇引く。

一六番目、ひまわりの詩**「また泣いてしまったよ」**

たわむれていた／／はじめは／じゃれて／／いた／／男と／女が／／いた／／水辺にいた／寝そべっていた／／駅があり／駅舎があり／／戦争があった／／草原があり／雪の草原があり／／ひまわりの草原があり／／女も／男も／／年老いていった／／ひまわり／揺れていた

一二六番目、椿の詩**「冬」**

秋が終わり／冬の始まるころ／／天辺が／白く／／光るのを／見たことがある／／あれが焼石岳と教えてくれたひとは／いない／／もうみんな／いない／／冬は／言葉がない／／紅い椿を胸に抱いている／焼石岳の／天辺を／／白く光らせ／／紅い椿を／抱いて／／雪の細道を行くひとがいる

こんなふうにゆっくりとさり気なく散歩するようなリズムで、花や大切な人に手向ける詩が続いていく。生きる哀しみを見つめ続ける詩人の紡ぎ出す言葉は、手渡された人にとって愛おしいものとなり、忘れ得ぬ風景として心の支えとなるであろう。

久嶋信子詩集『むすめの瞳』（コールサック社）を読む。**「毛糸だま」**の部分を引く。

…（略）…父をみおくった／母は／父が／着ふるした／セーターを／ほどきます／／父の／においがする／こえがする／セーターを／むしんに／ほどいて／ゆきます／金婚式をはるかにこえた／父と母の／むすびめが／はがされて／ゆきます／…（略）…母は／ていねいに／父のたましいを／セーターの／糸目から／ぬきとって／ゆきます／…（略）…母は／わたしの／両腕に／けいとをかけ／あうんの／こきゅうで／くるくる／まきとりながら／毛糸だまを／つくってゆきます／／母は／もう／父への追慕の／ことばを／口にすることは／しなくなりました／……だれもいない／家で／母は／また／父の／毛糸だまを／とりだして／あみものを／しだしました／じぶんの／カーディガンを／編み／はじめました／／できあがった／カーディガンに／満足した／母は／痛みが来ると／かならず／カーディガンを／はおります／／カーディガンは／母の／お守りです／…（略）…父の三回忌を／おえた年に／母は／父のもとに／いって／しまいました／…（略）

この詩は、父を想う母、母を思う娘を描いた久嶋信子の三十連の詩。詩集副題に「私に生（いのち）を灯した人たち」とある。誰もが灯されたいのちを生き、灯し育ててくれた父母を懐かしみ、しじまの中でひとり鎮魂の思いを捧げる。人々の尽きない涙の源である。

水田賢一詩集『会いにきたよ』（澪標）を読む。**「日の丸キャラメル」**を引く。

散髪屋で／坊ちゃん刈りにしてもらうと／一箱の〈日の丸キャラメル〉をくれた／もちろんそれは／お菓子屋さんにも／売っている／野球カードが中に入っていて／選手の写真と／四等分したボールと／点数が／印刷してあった／集めてボールの形に揃え

ば／キャラメル一箱に交換できたし／二〇点にもできた／点数を貯めて送れば／景品がもらえ／いろいろなものを／何度ももらったぼくは／何度も会社に／郵便を送った／大阪市／西成区／津守町／立花製菓／／つまらないことを／いつまでも／憶えているものだ／そのころ郵便番号などというものはなく／あれば／それもきっと／憶えていたはず

水田賢一の好きな「クリフ・リチャード」（「H先生」）を聴きながらこの条を書いている。やはり、昭和が鮮やかに蘇ってくる詩篇群に心魅かれている。子供心で見たことや夢中になったことが、必死に生きてきた彼の心の「余白」に刻まれている。それは時代の出来事や風俗の貴重な証言である。

『toy box』二十五号を読む。関東学院大学公開講座「詩を書く・エッセイを書く」の有志による同人誌である。巻頭に特別寄稿として**正津勉**の断章的詩篇「**小母さん恋情**」が掲載されている。正津さんが講師のようだ。**浅倉良子**「**ちんどん**」を引く。

横浜演劇祭の始まったたぶん95年／海の近くのブロックつづく／ちんちきドンドン、カン、チンチンカン、ぷおーん…と／人の少ない広場を／演劇祭のオープニングに練り歩く／ちんどん屋に扮した劇団の、傘、鐘、小太鼓、ラッパの4人／先頭の男が／わたしをみて手招きした／その手を後ろにながし声は出さずに、いっしょにとさそわれたので／5人で広場を、10分くらい／流し歩いたみなとみらい／／なぜ手招かれたのかちんどん風だったのか／38才のわたしは／ぶかぶかのワンピース着て大柄で／あのころはツンツンの／坊主アタマだった／そのときのわたしをちんどんに／さそった先頭の男は／串田和美だった／／ベリーショートの坊主アタマを／当然／家族は皆いやがっていた／おかあさんがアタマボーズだなんて気の毒な／小学生だった三人の子は　そのせいかみな大人しくて／今でも人前で無口な三人／かわいそうだったなでも／鏡を見るとじょきじょき自分で／刈り上げてしまう若かったワタシ／なぜだかわからない／美しいわけでも目立ちたいわけでもないのに／髪が伸びるとがまんできなくて／団員ちんどんだった二十年間／／今年3月27日塩沢雄三さんが73で死んだとき同じココロと思った／自分のカタチで生きたいキモチ／死ぬまで女装愛好家キャンディミルキイ楽しかったと言い切ったまっすぐな／ちんどん

楽し気な「ちんどん」の風景だ。その「先頭の男」が「38才のわたし」を手で誘った。それがかつて自由劇場を旗揚げした「串田和美」だった。「自分のカタチで生きたい」その願いを実践する浅倉良子は二十年の間「坊主アタマだった」と云う。自由ということを改めて思う。なぜなら、この詩もまたまさにその自由そのものを描いた詩だからだ。

季刊詩誌『カルバート』十三号を読む。詩篇、評論、写真等の充実した誌面に、主宰する**樋口武二**の熱意が伝わる。**山中従子**「**解夏**」を引く。

さようなら／と／言ってみた／すべての境界線が消えてしまった／さようなら／と／もういちど言ったら／わたしは／真っ青な空ひとつに囲まれていた／／ほら／目の前を／影が花になって／渡っていくよ

いのちある者が、まだ見ぬ世界に優しく誘われるような別れの詩に読者の心が奪われる。「解夏（げげ）」とは、インド発祥の仏教において、僧侶が草木虫の殺生を避けるため夏の期間、一か所に籠って安居修行することを云うそうだ。この詩は、生ある夏を生きたいのちある者が去り行くひとときの情景と読みたい。